

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520285

研究課題名（和文）ギリシア・ローマ文学における他者との共生に関する研究

研究課題名（英文）Study of the Symbiotic Relationship with the Other in Greek and Roman Literature

研究代表者

小川 正廣 (OGAWA MASAHIRO)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40127064

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋古代世界における他者差別や他者排除からの脱却化指向にともない、必然的に生じてくるより高次元の他者との共存の観念と共生の意識に着目し、そうした新たな人間観・社会観・自然観の形成と発達のプロセス、そして問題点などの実相について、ギリシアとローマの両古典文学のジャンル横断的な分析と考察によって明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The present study has paid special attention to the higher idea of coexistence with others and the symbiotic consciousness of the other which were generated in the ancient Western world as a logical consequence from the negative reactions to discrimination and exclusion of different people. It has investigated the various facts concerning the processes and problems of formation and development of those new human, social and natural views by analyzing and discussing closely the Greek and Roman classical texts through a cross-generic method.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：西洋古典学

科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ギリシア、ローマ、他者、共生

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代世界において、集団ないし個人の「アイデンティティ」の問題は、政治的・文化的変動の主な原動力となっている。すなわち民族・人種の反目、宗教的対立、性的差別

に対する抗議などさまざまな次元において自己の立場を鮮明に表出しようとする傾向が世界的に顕著になり、その結果広範囲の社会科学、人類学、歴史学、文学など人文諸学においても、エスニシティ、人種、宗教、階

級、ジェンダー、性的嗜好などにもとづくアイデンティティの諸問題に多大な関心が向けられている。

(2) そうした現代社会の課題に呼応した学術的動向の中で、さまざまな理論と見解を集約し結合するタームとして「他者性(アウター)」という基本的概念が重要性を帯びてきた。この「他者性」という概念は、民族・社会階層・性・年齢などにもとづく人間の種々のアイデンティティ(自己)を、各々の側面における異質なものととの対立とその排除という視点から逆照射して検証し、よりいっそう動的かつ全体的様相において客観的に規定するための方法的な立脚点として、今後なおお汎に人文科学全般において有効性を発揮するのみならず、人間の本質を追究した西洋古典を対象とした文学研究分野においても、細分化され狭小化した研究状況を克服し、新たな視点から、古代文学の営為の内実とその表象的価値を全体的に浮かび上がらせることを可能にするものである。

(3) 本研究代表者小川は、前回の科学研究費補助金基盤研究(C)の課題「ギリシア・ローマ文学における他者像の変容に関する研究」において、ギリシア初期から古典期・ヘレニズム時代を経てローマ時代までの古典文学に見られる個人および共同体にとっての他者像と他者認識のあり方を分析し、とくに人間と神、自民族と異民族、市民と非市民、自由人と奴隷、男性と女性、富者と貧者、老人と青年などの二項対立的構図に内在する他者意識の成立と変化について考察した。

その結果、人間と神などの宗教的領域は別として、個人や社会の世俗的關係に関する文学表現の中では、そうした他者意識はおおむね、ギリシア古典期以前すなわちホメロスの叙事詩や初期抒情詩などの文学ではまだ未分化で明確でない部分が多く、その後ギリシ

ア古典期の悲劇・喜劇・歴史・弁論などの文学ジャンルにおいて急速に発達・固定化したのち、ヘレニズムの文学を境目として次第に質的に変容ないしは内的に解体していく傾向を示すことが明らかになった。とりわけローマ時代の喜劇や恋愛詩では、奴隷や女性や貧者など劣位の人間が上位へと逆転する虚構が頻繁に取り上げられ、また散文ではキケロやセネカの哲学書において従来の市民と奴隷の峻別や富者と貧者の区別を重視しない人間観や社会のあり方が説かれた。

2. 研究の目的

本研究は、西洋古代世界における固定的な他者差別や他者排除からの脱却化指向にともない、必然的に生じてくるより高次元の他者との共存の観念と共生の意識に着目し、そうした新たな人間観・社会観・自然観の形成と発達のプロセス、そして問題点などの実相について、ギリシアとローマの両古典文学のジャンル横断的な分析と考察によって明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

具体的には、(1)ギリシア初期からヘレニズム期を経てローマ帝政時代までの叙事詩文学を対象として、個人および共同体の諸関係における自由と共生の観念を探り、その変容を跡づける。(2)他者としての「自然」を新たに取り上げ、自然との共生の観念と意識について、主にギリシア初期からヘレニズム期を経てローマ時代までの教訓詩文学を対象として分析する。(3)ギリシア・ローマの悲劇と喜劇の諸作品において、社会的関係における優位・劣位の他者との共生のモチーフを考察する。(4)プラトン、アリストテレスからストア、エピクロス学派等を経てキケロ、セネカおよびキリスト教父などローマの思

想家・宗教家までの著作の中で展開された人間の自由と人類共生に関する言説を比較検討する。(5)ギリシア・ローマの歴史書や地理学書に見られる異民族・異宗教との共存・共生の事例について検証する。

4. 研究成果

(1)古代ギリシア・ローマの叙事詩文学における共生について考察した結果、まず明らかになったのは、共生に関するギリシア人とローマ人の観念の相違である。実際ホメロスの叙事詩『イリアス』では、共同体間の戦争は、個人が名誉と栄光を獲得する機会であると同時に、究極的には運命や神々が定めた不可避で永続的な人間存在の条件として捉えられており、他方、平和は戦争のために決定的に失われ、恒常的に戦うべく宿命づけられた個人や共同体が永久に断念せざるをえないものとして示されている。しかしウェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』においては、そうしたホメロスの戦争観が根本的に見直されて、むしろ戦争は極力回避すべき非人間的な事態として否定的に描かれ、それはただ平和と共生を達成する手段として必要不可欠な場合にのみ正当化されうるというメッセージを読み取ることができる。本研究では、この代表的両古典作品の綿密な文学的分析から浮かび上がった相違の考察をとおして、人類の目標としての共生という、ローマ文明が世界の歴史にもたらした大きな転換とその影響を明確な形で提示することができた。

(2)この研究成果は、単著『ウェルギリウス『アエネーイス』— 神話が語るヨーロッパ世界の原点』(岩波書店)として刊行し、全国学会(日本西洋古典学会)の機関誌や全国紙(朝日新聞、下記5〔その他〕の欄参照)の書評記事にも取り上げられたほか、国内の学術集会などでも一部を発表した。さらに、日本

語圏内の市民・有識者や研究者に伝えるのみでは不十分だと考えたため、外国からの招聘に応じて韓国と中国での国際的な学術会議と研究集会においても英語による講演を行ない、アジアの隣国と欧米の知識人・学者・学生に学術的討論の話題を提供した。

(3)以上の研究活動を省みて、人文学・古典研究はそれ自体の専門的環境に埋没することなく、そこから得られた成果に対してより一般的レベルの評釈をみずから施して敷衍することにより、古典が内蔵する現代的意味を同時代の世界と社会に対して開示し、いっそう広汎な人々との対話と批判を取り入れていく方法もまた、総合的には重要で効果的であることを再確認した。さらにその意味では、本研究代表者小川がNHK文化センター(名古屋)で永らく担当している市民・社会人向けの西洋の古典と文明に関する連続講義(2008~2012年度には合計120回開催)等もまた、最新の学術研究の社会還元への役割を果たすとともに、本研究自体の深化と意義づけに貴重な養分を提供した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

1. 小川正廣「メゼンティウスと日本鬼子(リーベン・クイズ)—ウェルギリウスの叙事詩と日本兵の歴史的体験に関する比較考察—」、『名古屋大学文学部研究論集(文学)』59、2013年、1-33頁、査読有。

2. 小川正廣「中国における西洋古典の受容—徐光啓とユークリッド『原論』の漢訳と解釈」、松澤和宏編『テキストの解釈学(水声社発行)、2012年、203-235頁、査読有。

3. OGAWA, Masahiro, Xu Guangqi and the Chinese Translation of Euclid's *Elements*: Some Problems of Terminology and Their Cultural Context, *HERSETEC (Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration)* 5-1 (2011), pp.13-33, 査読有.

4. 小川正廣「「文字の力」趣旨と総括、文字使用と手紙」、日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』58, 2010年, 110-112頁, 117-120頁、査読有。

5. OGAWA, Masahiro, War and Peace in the *Iliad* and the *Aeneid*, *The Journal of Greco-Roman Studies (The Korean Society of Greco-Roman Studies)* 36 (2009), pp.1-22, 査読有.

6. 小川正廣「ウェルギリウス『アエネイス』におけるトロイア伝説とその受容」、『日本英文学会第81回大会Proceedings』、2009年、185-187頁、査読有。

7. 小川正廣「古代叙事詩における戦争と平和—ホメロスとウェルギリウス—」、『名古屋大学文学部研究論集(文学)』55、2009年、1-29頁、査読有。

8. OGAWA, Masahiro, War and Peace in Homer and Virgil, *The Proceedings of the Korean Society of Greco-Roman Studies 2008 Winter Symposium*, 2008, pp.1-15, 査読有.

[学会発表] (計4件)

1. OGAWA, Masahiro, War and Peace in Ancient Greek and Roman Epic Literature: Homer and Virgil, Academic Meeting of the

Institute for the History of Ancient Civilizations, 2010年7月7日, 東北師範大学世界古典文明史研究所(長春市、中国).

2. 小川正廣(代表)、シンポジウム「文字の力」、日本西洋古典学会第60回大会、2009年6月6日、一橋大学(東京都).

3. 小川正廣、Vergilius "Aeneis"におけるトロイア伝説とその受容、日本英文学会第81回大会、2009年5月30日、東京大学(東京都).

4. OGAWA, Masahiro, War and Peace in Homer and Virgil, *The Korean Society of Greco-Roman Studies: Winter Symposium*, 2008年12月13日, Soongsil University (ソウル市、韓国).

[図書] (計2件)

小川正廣、岩波書店、『ウェルギリウス『アエネーイス』—神話が語るヨーロッパ世界の原点』<書物誕生・あたらしい古典入門>、2009年、全198頁.

[その他]

報道関連情報

「現代的意味の理解みずみずしく—小川正廣著、ウェルギリウス『アエネーイス』—神話が語るヨーロッパ世界の原点, 岩波書店」、朝日新聞, 2009年4月19日(日)書評欄、評者: 作家・日本ペンクラブ会長 阿刀田 高

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 正廣 (OGAWA MASAHIRO)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 40127064

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし